編輯室の內外

第七卷の十二月號の發刊を終り、一月號の編輯にとりかゝるまでの寸暇を利用してチト早いが、十二月十七日午後五時から郊外五反田の松泉閣で編輯部員一同の忘年會を催した。勤儉奬勵中央委員會のビラを拜見してゐるし又不景氣の時節柄とて大したことは控へようとなつても無事に七卷を結了した同人一同の祝意をも現さなくちやとなつて結局白羽の矢を小兵衞淺香氏に立てて幹事の役目を仰せ附け松泉閣と言ふことになつたわけ。

當日は武井、田中の兩幹事をオン大として編輯部員一同洩れなく參集。例によつて、座敷へ通つてもヂツとしてゐることの出來ない連中とて配膳の出來るまでと碁盤を取り寄せて早速五目並べをはじめるやら將棋盤をひきつけて飛車角の逃げくらべをやり始めた。原稿用紙に似た碁盤や將棋盤のことながら、お手のものの編輯の如く意のままにならぬらしく、田中オン大が癇氣筋を唧つ吐息をつき、小兵衞氏亦「待つた！」を連發する程悲境頻々。その相手は何れも常に、オン大に「駄目やないか！」のお目玉を貰ふやら小兵衞さんの名編輯振りに牛耳られてゐる連中で。江戸の仇を松泉閣でとつて昂然としてゐる他愛なさ。猛優田中論愚さんが信州落ちをしたあとに、之を承繼する者がゐないため、ドタンバタンの曲藝はないが、五目並べと將棋の一勝負毎にとりまき連の歡聲悲鳴物凄く、お燗がひえますからと、女中サンに抗議を申込まれてやつとお膳に着く。

鹿爪らしい野暮な挨拶の代りに、今晩は無禮講とすとの宣告があつて直に盃を擧げる。はじめの喰ひ、しやべり、而して飲む！の順序が、アルコール分の豐富になるに從つて唄ひ飲み且つ喚くことになり。紅裙連の不振に業を煮やした血の氣の多い連中は三絃の伴奏なんかも俟たないで、やるわやるわ。

と突然奏樂中止の命令が銅羅聲の勸太によつて傳へられ、一同何事かと思へば、あらためて武井幹事から一人一藝披露會を開く旨の申し渡しがあつて、直に、平常無口のO君に先陣第一番たることを指命せられた。「適任々々」と一同同君を取りまいて、サア遣れと膝詰談判をやれば、困るかと思ひの外藝自慢の連中が足もとへも寄れないやうな美音で、お國名物一曲あつさりとやつてのけたのに一同啞然。以下右まわりの御順に、誰一人後を見せる者はなく、何處で何時仕込んだのか、夫れ〳〵の秀逸揃ひ。平素その道の通でゲスと、いやに片附けた者の半人もゐない編輯同人の、何處を抑へたらこんなものが出るだらうと不思議でならない程であつた。

一人一藝披露會が一わたり終つたら、サアやれと、又々一かたまりになつて唄ふ、飲む。二同何のこだわりもなく十二分の歡を盡して午後九時閉宴した。夏に大森でやつた丹羽幹事の送別會兼帶の懇親會があつて以來はじめてであつたが、久し振りに賑やかな集ひて心持が良かつた。この元氣で、この園藝の編輯同人一同で、第八卷でも亦道路の改良のために邁進しよう讀者各位と共に否全人類と共に―　一二、二〇（十八公）